

第 31 回「ことば」フォーラム

日本語の中の外来語と外国語
- 新聞，テレビ，J pop -

2007 年 3 月 24 日（土）

キャンパスプラザ京都 第三講義室

橋本 和佳（同志社大学）
石井 正彦（大阪大学）
伊藤 雅光（国立国語研究所）

後援：京都市・大阪大学・京都新聞社

共催：同志社大学

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会（森本祥子） それでは時間になりましたので、第 31 回国語研究所「ことば」フォーラムを始めさせていただきます。今日はお天気が残念な状況なんですけど、お集まりいただきありがとうございます。私、本日全体の進行を担当いたします国語研究所の森本と申します。よろしく願いいたします。2,3 ちょっと簡単な御案内をさせていただきます。まず、御手元に携帯電話、PHS をお持ちの方は、音が出ないように設定の確認をお願いいたします。それから、本日の全体の流れなんですけれども、御手元にお配りした資料の表紙にざっと書いてありますが、この後、所長よりの挨拶、趣旨説明がありまして、一人 30 分ずつのお話が三つ続きます。この間は、特に休憩あるいはまとまった質疑応答の時間は設けておりませんで、三つのお話をまとめてお聞きいただく形になります。そのあとに、15 分間の休憩を挟みまして、予定としては 3 時半から、今日の報告者 3 人が前に並んで皆さんの質問に答えながらディスカッションというふうな計画を立てています。それで、皆さんいろいろお話を聞きながら質問なども思い浮かぶかと思えますけれども、それは御手元の資料の中に A 4 の半分のサイズで質問票というのを同封してあるかと思えます。そちらにいろいろ思いつかれた質問などをどうぞ積極的に書き添えて、休憩時間のできれば前半 5 分か 10 分の間にちょっとまとめていただきまして、スタッフと名札をつけている者にお渡しください。まとめて後半のディスカッションに使わせていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。それでは、まず国語研究所の杉戸清樹所長より一言最初に御挨拶を申し上げます。

杉戸所長 皆様、ようこそお越しくださいました。今、司会の者も申しましたがお昼くらいから雨が降り出してしまいました。年度末のこの時期、お忙しいことと思います。そんな中お越しいただきまして、本当にありがとうございます。この「ことば」フォーラムという催し事は、私ども国立国語研究所が毎年数回開いております。今回で第 31 回目になります。京都で開かせていただくのは初めてであります。今回は、同志社大学からは共催というお立場、そして京都市・大阪大学・京都新聞社からは御後援という形で、それぞれお力添えを頂いて開くことができました。ありがとうございます。この「ことば」フォーラムですけれども、日本語について、あるいはほかの言葉も含めた言葉というものについて、その時々話題を選びまして、世の中の言葉の姿・あり方、あるいは言葉の研究で分かっていること、これから調べなければいけないとい

う課題など、言葉の諸々の問題についてテーマにする、そういう種類の催しです。研究とか教育という言葉の専門のお仕事に就いていらっしゃる方だけでなく、いろいろな分野でお仕事をなさっている方、あるいは御家庭や地域で普段の言葉の暮らしをしていらっしゃる方、そういう方にお聞きいただき、また御参加いただいて、短い時間ですけれども言葉について御一緒に見つめ直したり考えたりする、そういう時間を過ごしていただける機会となるように心掛けて続けてきております。31 回目の今日は、テーマとして、日本語の中の外来語あるいは外国語というものをテーマに選びました。この後担当者から詳しい趣旨などを説明いたしますが、新聞、あるいはテレビ、あるいは新しい歌謡曲、そういったいろいろな書き言葉、話し言葉、歌い言葉といいたししょうか、いろいろな立場の人が読んだり聞いたりする言葉の中で外来語・外国語が今どんなふうになっているのかという、そういった部分に目を向けた企画といたしました。よく言われることですが、分りにくい外来語が増えてきて困っているという声も聞きます。あるものは使われ続けます。あるものはすぐに使われなくなって消えていきます。こういった言わば目まぐるしい状態があります。さらに外来語、これは普通カタカナで書かれますけれども、そうした外来語だけでなく、外国語そのままの文字使いで書かれた看板ですとか、広告ですとか、そういったものを日本語の中に、あるいは町の中に見るようになりました。この建物の御手洗いの表示は、「MEN」と「WOMEN」となっているんですね。さっき使わせてもらって、「ああ、ここもか」と思ったんですけれども、外来語でなくて、あれはやはり外国語なんだと思います。それが使われています。そういった外来語とか外国語が今実際にどんなふうに使われているのか、この先どんな方向に動いていきそうなのか、そういったところを考え、そしてそこに何か問題があるんじゃないだろうかという点についても、皆様と御一緒に考えることができるといいと思います。本日は、新聞とテレビの現状について研究なさっているお二人の講師をお願いしております。同志社大学の橋本さん、それから大阪大学の石井さんです。それぞれこれまでの研究の中から、具体的なお話が伺える資料も準備してくださっています。たいへんありがたいことです。どうぞよろしくお願いたします。お二人のお話の後に、国語研究所の所員、伊藤が一つ発表した後、いつもの「ことば」フォーラムは最後の質疑等は短くなってしまおうんですが、今回はそこを長く取って、質問や討論していただく時間も用意しておりますので、御来聴の皆様からもどうぞ積極的に御質問あるいは御意見をお出しくださいますようお願いい

たします。夕方までのごく短い時間ではありますが、御来聴の皆様方それぞれが、日本語や外来語についてちょっと立ち止まって考える時間を過ごしていただく、毎日の暮らしの中で暮らしの言葉を見直す、あるいは見つめ直す、こんなきっかけにさせていただく時間を過ごしていただければ幸いです。どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。(拍手)

司会 それでは続きまして、本日のフォーラムの構成等について、国語研究所の伊藤より趣旨説明をいたします。お願いいたします。

伊藤 国立国語研究所の연구원をしております伊藤雅光と申します。近年、外来語が氾濫している、あるいは乱用されているという声をよく聞くようになりました。それは本当に乱用されているのか、あるいは今後どうなっていくのかということを考えていくときは、その実態を正しく把握しておかなければいけません。今日の三つの発表に共通しておりますのは、いろいろな媒体における外来語及び外国語の実態の報告であるという点で共通しております。更に言えば、調査方法も共通しております。計量的な調査方法を取っております。計量的言葉の調査というのは、ほとんどの方ご存じないかと思いますが、実は50年以上も前から行われておりまして、そういう分野を計量言語学といいます。国立国語研究所は、日本の中における計量言語学のセンターとして、これまでいろいろな用語の調査をまいりました。今日の発表者のお一人であります石井さんは、実は元国語研究所の연구원でして、研究所時代はテレビの用語調査を担当されました。そこで石井さんには、テレビの中における外来語についての実態報告をお願いいたしました。それから、同志社大学の橋本和佳さんは、早くから計量的な研究に興味を持たれて、主に新聞の社説における外来語の歴史について調査を行ってこられました。そこで橋本さんには、その点の報告をお願いいたします。それから私、伊藤は、J-popの大御所であります中島みゆきと松任谷由実のこの30年間にわたってつくられてきた歌詞の中で、外来語とか外国語がどれくらい使われているのかというような御報告をいたします。さて皆さん、最近、新聞、雑誌、あるいはテレビの中でアルファベットが随分目立つようになったとお気付きの方も多いかと思いますが、つまりアルファベットを使うということは、外国語を使っているということなんです。外来語については、これまでも多く取り上げられてきましたが、日本語の中における外国語というのは、ほとんど取り上げられてきたことはありません。しかし今後、外国語はどんどん日本語の中で使われだすのではないかと、もっと今よりも使

われるのではないかということ、10年ぐらい前からどうも気になっていたんですね。そこで今日のフォーラムでは、外来語だけではなくて、外国語のほうにももう少し目配りをして、こういうテーマを設定いたしました。これから3時間にわたりますけれども、皆さんとその点をいろいろ考えていきたいと思います。それでは、よろしくお願いたします。(拍手)

「新聞の中の外来語・外国語」橋本 和佳 (配布資料 p.1~7)

司会 それでは早速、最初の報告に入りたいと思います。同志社大学の橋本和佳さんに「新聞の中の外来語・外国語」というテーマでお話しいただきます。橋本さん、よろしくお願いたします。

橋本 同志社大学の橋本と申します。どうぞよろしくお願いたします。今日は外来語のお話をするということなのですが、最初に、外来語というものが日本語の中でどういう位置付けにあるのかということの確認をしておきたいと思います。なお、前でお見せしますスライドは、御手元にあります資料とほとんど同じですので、どちらを見ていただいても結構かと思ます。どの言語でも同じですが、日本語の中には、もともと日本語の中にあつたと思われる固有語と、日本語以外の言語から取り入れられたと思われる借用語との2種類があります。日本語の語種というときには、今からお見せします(a),(b),(c),そして(d)という、この4種類のことを語種と言います。それぞれ和語・漢語・外来語・混種語というふうに言います。和語はもともと日本語の中にあつたと思われるもの、漢語は中国語起源の語、音読される漢字を思い浮かべていただいたらいいんですけども、そういうものです。今日お話するのがこの(c)の外来語で、漢語以外の借用語としていますが、大体英語起源とかフランス語とか、欧米の言語からのものが増えてきています。(d)としましたのは、(a)と(b)の組み合わせとか、(b)と(c)の組み合わせとかがあるんですけども、組み合わせで使われるものです。私は語彙調査をしているんですけども、語彙調査というのは一体何なのかということで、まずお話をしたいと思ます。ある言語の中に含まれるボキャブラリー、語の総体を語彙と言いますが、それを調べるときにはどんなふうな手順をとるかということ、まずある言語資料を選びます。それは書き言葉であつたり話し言葉であつたりしますが、いろんな資料の中から何か一つ選び出す。一つに限らないんですけども、いくつか選び出します。そこから、そこに使われて

いる言葉，語彙を抜き出してきて調査をするわけですが，その場合，ある言語資料に使われているすべての語を調べる全数調査と，その中からあるグループを抜き出して調査する標本調査というものの2種類があります。そして語彙表というものを作成しまして，それを基に語彙の構造を分析するというのが語彙調査の流れです。何を調べるかについてはいろんなやり方がありまして，調査対象や，何を調べるかということも自分で選ぶことになります。その調査対象の選び方は，目的に合わせて，というふうなことになるかと思えます。分析の方法もいろいろありまして，量的な分析を行ったり，質的な分析を行ったりするということになります。今日お話するのは，分析方法としては，先ほどもちょっと紹介していただきましたけれども，計量的な方法で量的な側面について調べたもの，その報告をしたいと思えます。語彙調査には粗く分けまして2種類の調査方法があります。一つ目は共時的な調査と，二つ目は通時的な調査です。用語は何か難しそうなんですけれども，どういうものかといいますと，共時的な調査というのはある一時点，ある年とか，ある日とか，ある年代について調べるというふうなものです。それに対して通時的な調査というのは，例えば上では2007年の新聞を調べましょうというように，ある時点の調査になるんですけれども，通時的な調査というのは，例えば57年，67年，77年，87年，97年というふうに経時的に資料を取り出してきて調べようとするものです。それぞれ主な目的は違ってまして，上のほうですと，現代の日本語の実態がどのようなものであるのか，どんなバラエティーを持っているのかというようなことを集中的に調べることになります。それに対して通時的な調査というのは，現代日本語がどのように成立してきたのか，どんなふうな過程を経て今の状態になったのかという変遷を探ることを目的に行います。この辺りについては，後で具体例を挙げてお話をいたします。今日は，私のほうでは新聞の中の外来語・外国語ということでお話をしますけれども，新聞を調べるというときに，調査資料としてはどのような価値を持っているか，どのような存在なのかということをお話いたします。通時的調査というのはなかなか面倒くさいものでして，長期間にわたる資料というのがあまりありませんので，通時的な調査を行うこと自体が難しいんです。そんな中，新聞というのは新聞社によって違うんですけれども，長いものですと明治時代から平成という現代に至るまで，非常に長い間ほぼ毎日発行されているという資料なんです。しかもその新聞は，昔のものも含めて縮刷版とか復刻版とか，あとはフィルム形式のものとかで保存されていますので，今の私たちも見

ことができます。1980年代以降については、各社データベースを提供していますので、テキスト化されたものも調査に使うことができるということで、非常に有用なわけです。言葉を調べようと思いますと、できるだけたくさんの言語量が得られる媒体が望ましいんですけども、新聞の場合は、細かい字でぎっしりと埋められていますので、情報量が非常に多い、そして読み手も多い、これも重要なわけですけども、たくさんの人が目を通している媒体であるということで、共時的な調査はもちろんのこと、通時的な調査を行うには非常にいいということで、私も利用しているわけです。新聞における外来語というものについて考えるときには、新聞が外来語に対してどのような態度をとっているかということも、調査する者にとっては意識しておかなければならないことです。新聞の中の外来語使用ということを考えてときには、大ざっぱに言ってしまうと抑制的な使用であると言っていいと思います。それをなぜそのように言えるかという点、『朝日新聞の用語の手引』を例として挙げていますが、新聞社各社は外来語をどういうふうにするべきかという文言を手引にそれぞれ載せています。大体どの社も共通して次のような言葉が書かれているんです。ちょっと読ませていただきます。「外来語・外国語は乱用しないように注意する。新しい概念で適当な言い換えのないものや、専門語で一般的に分かりにくいものは、その下にカッコして短い説明を入れるか、記事の末尾に注として説明を入れるなど工夫すること」というふうな言葉があります。『朝日新聞社の用語の手引』の場合は、1974年版から現行版に至るまでずっとこのような記載があります。ですから、記事を書く人、文章を書く人が新聞の場合は、この手引を参考にするとか、見ながら書いているということで、抑制的な使用なんじゃないかなということが言えます。調査資料としての新聞の性格について簡単に説明をいたしました。次に、実際に行われた調査の例を挙げていきたいんですけども、まず、最初に(1)として紹介しました共時的な調査というものの例を見ていきたいと思います。新聞の外来語と一口に言いますが、新聞はどの新聞とか、どの辺りを使うかということで随分結果は違って来るわけなんです。一つの例として面種、新聞の中のどの面が外来語をよく使っているのかを調べる調査があります。この調査では、2003年発行の『毎日新聞』の朝夕刊を用いて、「国際面」「家庭面」「芸能面」「経済面」「文化面」「科学面」「スポーツ面」「社会面」という8面種について調査を行っています。ちょっとレジメが間違っているんですけども、「1万語ずつ」と書いたんですが、全部で1万語でしたので訂正をしておきます。これによりますと、

2003 年の『毎日新聞』における外来語の割合を延べ語数というもので計っているのですけれども、8 面種全体では 3.5%という割合が出ています。非常に少ないですね。普通に自分たちが思っているよりも少ない割合であるということも指摘しておかないといけないと思います。全体を見れば 3.5%なんですけれども、面種によってこの値も違ってきます。一番よく外来語が使われるのは、スポーツ面ということですね。次いで芸能面、経済面、科学面、そして家庭面、社会面、文化面と続いて、国際面というのは一番少ない値になっています。スポーツ面と比べたら 2.5 倍以上という差がでています。国際面というのは政治に関する面ですから、政治を語る時、堅い話題を語る時には余り外来語は使われないというふうなこともいえるかと思います。次に、今度は面種別ではなくて、現代の新聞を新聞紙別に見たら差があるのだろうかということで、その違いを調査した結果を御紹介いたします。この調査は 2000 年発行の朝日・毎日・読売・日経の 4 紙を調査していきまして、経済面に絞った調査を行っています。経済面は先ほどのページで見たように、結構外来語使用が多い面なんですけれども、その調査です。その結果を見てみますと、こちらは一文当たりの外来語数という計算なんですけど、『読売新聞』が一番多いという結果が出ています。日経紙が非常に少ない値になっているんですけども、そこでは『読売新聞』の半分ぐらいという結果になっています。このように、違いはもちろんあるんですけども、読売・毎日・朝日という全国紙、一般紙においてはそれほど差はないというふうに言ってもいいかなと考えます。このように、共時的な調査からは、新聞の外来語とって一括りにできない部分ということを明らかにすることができます。つまり、面種によっても違うし、新聞社によっても扱いが違う。数値に違いが表れてくるということを知る有力な手掛かりを得ることができます。そういうような現在の状況を把握した上で、じゃあ、今までどんな過程を経てそういうふうになってきたのだろうかという疑問が出てくるわけです。今の状況に至るまでどんなパターンを描いてきたのだろうかかなあと思う。直線的にずーっと同じペースで増えてきたのだろうか、それとも蛇行しながら不規則変動できたのだろうか、それとも指数的に、最近になるにつれて増えていっているのだろうかというふうなことが気になってきます。共時的な調査ではそれをなかなか明らかにすることはできませんので、先ほどの通時的調査というものが必要になってきます。これ以降は、通時的な調査について説明していきたいと思います。私がやっております社説を使った調査を紹介していきたいと思います。なぜ社説を使って調査するのかとい

うと、社説は、ずいぶん昔までさかのぼれるからです。明治時代からあるんですけれども、長い間掲載されてきた。しかも新聞の顔ですよ。一つの看板として非常に重要なものであると思われます。それから、一人の人が書いているんじゃないで、何人かの人が交代で書いているという点でも、調査の資料としては非常にうれしいと思いますか、いいかなあというふうに思います。普通名詞だけを数えた結果をお見せします。資料と書かれた6ページの【図1】を見ながら、お話をしていきたいと思います。1911年～2005年の毎月9日の社説というのをずっと縮刷版をコピーして数えていったわけです、外来語の数を。それをグラフ化したものが【図1】です。この点々が各年のデータなんですけれども、線をつないでいる棒線をちょっと見ていただきたいと思います。これによりますと、何となくおぼろげにパターンというのが見えてくるように思いませんか。先ほど、直線的かなあとか、不規則かなあとか、指数的に増えているのかなあとかいうふうな予測をしてみましたけれども、どうもそうではなくて、まず初めのほうはすごくゆっくりと増加しているように見える。そして、半ばごろで、あるときからグーッと大きく増加していくようだ。けども、最後のほう、最近のあたりを見てみるとどうもあまり伸びていない。終盤では再び緩やかな増加に転じているようだということが読み取れるのではないのでしょうか。このグラフからこんなふうに言えるかなと思います。大正から昭和戦前にかけては外来語の使用は少なく、非常に少ないですね、そしてゆっくりと漸増する。かすかに増加の兆しが見えるというふうな状態。微増というか漸増していつているわけなんですけれども、かすかに増えていつているわけですが、戦後、1950年代後半ぐらいからは一気に坂道を駆け上がるように増加していく。けども、1980年代以降を見てみると、その増加は大分鈍ってきている。安定化しているように見えるということです。外来語の増加というと、一般に戦後増えたというふうなイメージをお持ちの方もいらっしゃるかもしれませんが、こういうグラフを見てみると、必ずしも戦後増え始めたわけではなくて、戦前から連綿と続いていくかすかな増加というものがあって、それを土台にして、あるときからバーンと増えたんだなというふうなことも見えてくるかなあと思います。この『朝日新聞』の社説を使って各年の変動を取ったのが、今紹介した【図1】でした。でもそうになると、その新聞だからそうなったんじゃないのという批判が研究者としては非常に気になってくるわけです。ほかの新聞でもやはりやってみないといけないということで、5年ごとの調査ですけれども、同じような方法で調査を行いました。

『読売新聞』の場合は、1931年から社説が毎日掲載されるようになりますので、ほぼ75年ぐらいの調査になっています。ちょっと詳しくは見られないのですが、先ほどの6ページの【図2】というのがそのグラフです。5年ごとですから、ちょっと変動が大きいですが、読み取りにくいところもあるんですけども、しかし最初のほうはある程度緩やかに増えていて、真ん中あたりでグッと伸びて、最後は読み取りにくいけれども、真ん中で見られるような増加はなくなってきているんじゃないかということで、ちょっと荒っぽいんですけども、同様のパターンというのが確認できるのではないかということです。ここからは、社説の外来語というのは、S字型カーブを描くように増加してきたというふうに言えるのではないかと考えます。このS字型カーブについてごく簡単に説明いたしますと、典型的な成長とか普及の過程を表す曲線として、一般的な現象に広く用いられる理論曲線と呼ばれるものです。例えば人口増加ですとか商品の普及過程、例えば携帯電話の普及過程などを見ると、直線的に増えるんじゃないで、S字型を描くように増えていくんだということがいろいろなデータから明らかにされています。これらを参考にして、7ページの【図3】S-curve モデルというふうなものを考えてみました。S字カーブというのはSの字を横に平べったく伸ばしたようなものなんですけれども、日本語の中の外来語の場合、こういうふうな過程をほぼ描いているのではないだろうかと思っているところです。商品の普及なんかでもそうなんですけれども、外来語というのは、ほかの場所からやってきた新規参入者というか新参者なわけですね。もともとなかったところに外から新しいものが入って行って、それがどうやって根付いていくかというふうな過程を考えるのは自然ですよ。そう考えると、このS字カーブを当てはめるのも無理なことではないかなというふうに思います。もともとある世界、和語とか漢語というのを紹介しましたけれども、その中に後から入ってきて、それがどう増殖していくかという過程を通時的な調査から明らかにすることができると考えています。それで、どんどん進んで行って恐縮なんですけど、一般的な感覚としては、今も外来語は増え続けているように思いますし、すごくあふれかえっているようなイメージを持っています。けども、80年代以降からこのようにあまり増えないという結果が出たのはなぜだろうかと思えば、90年代以降、新聞やテレビに対しては、外来語を抑制的に使用したほうがいいんじゃないかという流れがありますので、それが何らかの影響を与えているんじゃないかなというふうに考えています。今後の予測ということは非常に難しいんですけども、そ

れほど大きく増加しないのではないかなと予想できるのではないのでしょうか。この辺りについては、多分ディスカッションのところでも話題になるかもしれませんが、後でということにしたいと思います。社説だけ見てどこまでいえるのかというのは非常に疑問なところではあるんですけども、天野祐吉さんという広告批評家の発言から、60年代の急増期と90年代の飽和状態になってきているというところを読み取れるかなと思って、レジメの3ページに引用しました。読むことはしませんけれども、60年代には非常に今思っているよりも^{はんらん}氾濫していたような、そういう雰囲気があったんじゃないか。90年代になると、新しいというイメージがなくなってきている。確かにそうかもしれません。見慣れてきました。90年代ぐらいからは、逆に和語を使うのが新鮮に思われるようになってきたという発言がありますけれども、外来語がどうも新しさを失いつつあるというふうな現状も指摘できるかもしれません。ここから話が変わりまして、通時的な調査というのが終わって6章ということで、外国語の問題について少し考えたいと思います。外来語が新しいものでなくなってきたとき、それ以外のものが何かそれに代わって増えていくんじゃないかなというふうに思います。その一つに和語が再び今脚光を浴びるというのがありますけれども、外国語というのも新聞の中でも随分増えてきているようです。ここからは、今日お話しになる伊藤先生の定義、外来語を仮名表記されたもの、外国語をアルファベット表記されたものとする定義に従って、ちょっと今までと定義が変わりますけれども、アルファベット表記されたものについて見てみたいと思います。ミニ調査を行いまして、新聞にはあまりアルファベット表記がないんじゃないかなという予想だったんですけども、見出しなんかを見ていると、結構よく使われているということも気になりましたので、2006年11月に創刊されました横書き新聞である『SANKEI EXPRESS』の紙面を使って調査をしました。横書き新聞であるということは、外国語調査をしようと思ったときには非常に都合がいいということで、これを選びました。1月、2月の「見出し」から抜き出して、大体300語ぐらいは得られましたので、その結果を見ていきます。見出しによく使われる外国語ということで見てみますと、一番多いのはVですね。これもスポーツ紙面に限られているんですけども、勝ったとか勝利とか優勝の代わりにV一文字で済ませてしまう。あと、ニューヨークとか、NHK、TBSとか、そういう社名とか商品名とか地名などの固有名詞も略記でも結構出てきています。それから、それ以外ですと、ザーッと見てもローマ字略語がほとんどなわけですね。日本語に翻訳す

ると長くなってしまうものを短く表現するために、こういうふうなアルファベットが利用されている様子がよく分かります。この中に GO とありますが、これはローマ字略語ではなくて、ゴーです。このような英単語も結構、数は少ないんですけども、使われています。ちょっと時間がないので、もう一気に見てみますけれども、web とか GO, GO というのは最近本当によく見ますね。使われています。あと、NO というのもよく使われています。二文字ぐらいが使いやすいのかなという気がします、up とかね。そういうふうな名詞、動詞、副詞、形容詞も使われています。それに対して、前置詞とか所有代名詞、疑問代名詞という、内容語ではなく機能語も結構使われているわけです。それから、句として使われているものもありまして、こういうのは、外国の新聞をそのまま見出しを取り入れて、外国で使われている表現を引用しているようなものですから、本当に外国語という感じがします。それで、海外進出した日本語とか日本人とか、それが最近よくニュースになりますけれども、例えば松坂が外国で活躍し始めると、もう向こうの人というか外国の人ようになって、DAISUKE というふうに書かれる。MANGA とか Manzai, Su Doku というふうなもの、もうこういうのは日本語じゃなくて外国語なのかなという気もしてくる。こういう新しい用法もあります。世界の DAISUKE になったんだというふうな意味が、このローマ字表記から読み取れる。MANGA もそうですよね。こういう使われ方も、NOMO とか ICHIRO とかあたりからよく使われているんじゃないかなと思います。こんなふうに外国語も結構使われているんですけども、今見たのは見出しを調査したものだからという点に注意しなければいけないと思います。本文に表れているのは調査していないんですけども、見出しでよく使われる理由としては、見出しの性格というものが関係しているのではないのでしょうか。「見出しは読者を本文に引きつけ、いざなう看板、案内標識であるとともに、記事の勘どころを前もって知らせ、本文を読み進めやすくする役目を果たす。簡潔な記事の極致でもある」ということですよ。ローマ字略語が多用されているのは、きっと簡潔な記事を書くためであろうし、英単語が効果的に使われているのは、きっとそれが看板で目立たせたいからじゃないかなというふうに思われるわけです。ですから、なぜアルファベットが使われるのかということを考えるにしても、いろんなとらえ方があって、もっともっとこれから分析していかなければならないのではないかなと思っています。ちょっと急いすみませんでした。以上です。ありがとうございます。

(拍手)

「テレビの単語使用 外来語を中心に」石井 正彦（配布資料 p. 8 ~ 16）

司会 橋本さん，どうもありがとうございました。最新の先々月のデータも取り入れてお話しただいて，非常に興味深い楽しいお話でした。それでは，このまま続きまして，次のお話に移りたいと思います。次は，大阪大学の石井正彦さんより「テレビの単語使用 - 外来語を中心に - 」ということで，今度はテレビの言葉を素材にしたお話をお願いいたします。それでは，どうぞお願いいたします。

石井 大阪大学の石井と申します。どうぞよろしくをお願いいたします。先ほど伊藤さんから御紹介ありましたが，私，7年前まで国語研究所に勤めておりまして，16年間おりました。そのうちの後のほうの10年間，このテレビ放送の語彙調査というものにメンバーの一人として参加していました。メンバーといってもたった5人しかいなくて，後で申し上げますけれども，非常に小さな調査にもかかわらず，調査対象といいたしょうか，テレビを録画し始めてから最後の報告書を出すまで10年かかってしまいました。それで疲れ果てて辞めたわけじゃないんですけれども（笑），その後大阪大学に転じまして，最近は何もテレビのことを私自身はやっていなかったんですけども，私のゼミの学生でテレビなどをやる人も出るようになりまして，再びテレビにちょうど関心をまた持ち始めていたところ，今回のお誘いを受けまして，こういう場でお話させていただくということで，大変光栄に思っております。それで，資料集の8ページに，要旨ということで私が今日申し上げたいことをまとめておきました。最初にそのところを御説明したいと思います。テレビというのは，今の日本において，もちろん「情報の発信源」として私たちの暮らしの中で非常に大きな位置を占めるメディアですね。情報発信源というだけではなく，娯楽を提供するメディアというのでしょうか，テレビを通してニュースを見たり，芸能番組を見て楽しんだり，スポーツ中継を見たりと，もう私たちの暮らしの中はかなり入り込んできているメディアです。そういうテレビの中で，出演者とかアナウンサーとかナレーターとか，いろいろな人がいろいろな言葉を発しているその言葉が，本来の目的とは別に，私たちの言葉遣いに影響しているんじゃないかという話は前からあるわけで，特に子どもの言語形成にテレビが悪影響を与えているという話はよく聞きます。実際，いろいろな事例などを伺うと，そううなずけるところがあるんですね。今，小学生・中学生がいきなり教師に向かって「死ぬ」と言ったりするということをよく聞きますけれども，どうもいろいろ聞いてみると，なんかテレビでもよくそういうことを，特に芸能人というんでしょ

うか、芸人というんでしょうか、そういう人たちが出るような番組で突然そういう言葉が発せられたり、頭を殴ったり、いろいろなことをしている。そういうものを子どもが見てまねしているんじゃないかというふうなことをおっしゃる先生や親御さんがいらっしゃるんですね。それを本当にテレビのせいなのかというのはなかなか確かめにくいところがありますけれども、少なくとも何らかの形で影響しているんじゃないかという疑いというのでしょうか、それは持たざるを得ないわけです。ただ、そういった言葉の乱れにテレビが影響しているということを、その前に進めて、もうちょっと客観的にというか、本当にそうなのかということ調べるためには、むしろ私たちの個人的な印象ではなくて、テレビで実際どんな言葉が使われているのかということまずは調べるということが必要ですね。ところが、これがなかなか手間がかかる仕事で、なぜ手間がかかるかというと、先ほど橋本さんのお話の中に語彙調査というお話が出てきましたけれども、テレビの語彙調査をしようとする、要するに……、例えば新聞ですと、書かれたものとして残っているわけですね、目の前に。それをパソコンに入れたりいろんなことをして、どんな単語が何回ということ数を数えることができる程度、もちろん手間はかかるんですけど、できます。ところがテレビというのは、ポーッと見ているとどんどん過ぎ去っていくんですね。画面も音声もです。文字というのは音声を書き記して目の前にとどめるために発明されたものだなんていいですけど、テレビでは全く当てはまらないです。文字もどんどん消えていきます、目の前から。そういった瞬時に消え去ってしまうものを、どう目の前に固定させて、そしてどんな単語が何回使われているかなどと調べるというのは、ちょっとやりたいとは到底思えない手間のかかる仕事ですね。国語研究所は語彙調査をたくさんしてきましたけれども、本格的に手掛けたのが婦人雑誌とか総合雑誌とか雑誌 90 誌で、後でお話が出るとは思います、現在も月間雑誌の調査結果などが報告されています。その中で「テレビっていうものをやりましょう」と言って、その結果 10 年かかっちゃったというのが私のときの時代で、しかもたった 4 人とか 5 人でやったものですから、非常に大変だった。多分この後、テレビを調査するということが国語研究所だけでなく日本の言語調査の中であるかというのは、非常に難しいと思いますね。これは、NHK放送文化研究所という所がありまして、そこでもいろんな調査をされているんです、テレビもラジオも。しかし、やはり全体的に、テレビでどんな言葉が、どんな番組で、どんな人によって話されているのかってことを調べることはされていないんですね。

これは本当に手間がかかる。成果が出たころにはもう時代が変わっちゃって、そんなことは時代遅れだということになっちゃうということですね。ですから、ある意味で非常に関心は高いんだけど、その関心に応えるだけのデータを出すことができないという、ちょっとした悩みといいたいでしょうか、それがあつたわけですね。私が参加したそのテレビ放送の語彙調査も非常に規模が小さいもので余り確かなことをいえないんですけども、和語・漢語・外来語とかいう世界ですと、そういう単位ですとある程度のことはいえるんじゃないかなと思います。今日はそのデータに基づいたお話をしようと思うんですけども、ただ、今日の大きなテーマである外来語と外国語のうちの外国語については、ちょっとお話しすることができないんですね。これはテレビの調査で外国語を最初から調査対象から外しているものですから、外国語についてのデータというものはないんです。これは 89 年 4 月～6 月の番組を調査したものですから、もう今から何年前でしょうか、17～18 年前、もう 20 年近く前ですね。その当時の調査の目的がそこで使われている日本語の語彙の調査だったものですから、外国語も語学番組などを除いたとしても多少使われてはいたんですけども、主たる対象にはされなかったもので、今日は外来語についてのお話だけということになってしまいます。それから、今申し上げましたように、調査規模があまり大きくないものですから、個別の外来語の話というのはなかなかできないんです。後でちょっと出てきますけれど、アイアイという猿がいるんですね。それがなぜかきいているんです、上のほうに。どうしてかということ、たまたまサンプルの中に「アイアイ」という歌が入っているんです。皆さんご存じのように、アイアイアイアイとずーっとアイアイばかりなんですね。(会場笑)それでアイアイが 30 回、40 回という話になっちゃって、「じゃあ、テレビで一番よく使われる外来語はアイアイだ」とか言えないんですね。これはもちろんお分かりのことだと思いますが、小さいサンプルから全体を推定しようというときに、そういう個別の話というのはなかなかできにくいんです。調査が大規模になりますと、偶然そういうものが入ってしまったということの誤差はだんだん小さくできますので、信頼性のあるデータといえるんですけども、私たちの延べで 14 万語程度という調査では、なかなか個別の外来語についていうことができないんです。その点も申し訳ありませんが、御了承いただきたいと思います。結論として、そのデータに関して外来語がどのくらい使われているかということ、後で具体的な数値をお見せしますけれども、余り使われていないんですね。使われていたとしても、そのうちの 3 分の 2 は中

学生向けの辞典に載っている外来語です。残り3分の1の載っていないものも、使われる頻度が非常に小さいものばかりなんですね。だから、たくさん使われる外来語があったとしても、それはもうそういう中学生向けの辞書には載っているようなものであって、載っていないとすれば、それは余り使われない。使われたとしても、そう多くはないんじゃないかという予想が立ちます。先ほど申し上げましたように、テレビというのは言葉の乱れの原因だとかよく言われる。外来語に関しても、じゃあテレビは外来語をいろいろ乱用して世間の人を困らせているかということ、どうもテレビに関してはそういうことはないんじゃないかと、89年の時点のデータからはいえそうだとしたことなんですね。それはなぜかということになるんですけども、結局テレビというのは、特に私たちが対象にした、東京のテレビ局の名前でいいますと、NHK総合・NHK教育・日本テレビ・TBS・フジテレビ・テレビ朝日・テレビ東京、関西ですと、NHKは同じですが、読売テレビ・毎日放送・関西テレビ・ABC放送、そしてテレビ大阪でしょうか、こういう系列になっているんですね。その全国ネットの系列を持っている放送局を対象にしたので、要するに放送の公共性といいたいでしょうか、誰が聞いても分かるようにということをやっぱり心掛けるテレビ局なんですね。放送している番組が非常に極端に専門的な番組ですとか、極端にマニアックだとか、そんな番組というのはほとんどないわけです。もちろん番組はバラエティーに富んでいるので、いろんな番組が放送されていますし、教育テレビなんか見ると高等学校講座とか大学何々とかあるわけで、かなり専門的な番組を含んでいることは間違いありませんけれども、全体として見るとやはり、誰にとっても分かる、誰が見ても分かる、そういうことを前提として番組がつくられていて、しかもそこで使われている言葉というものは多くの場合、特に耳で聞く、画面で表示されますけれども、主体はあくまでも音声として出てくるわけで、その音声に訳の分からない外来語をたくさん盛り込むということはほとんどないだろうというふうに想像されるわけです。しかし、それは20年近くたった今そういえるかということ、これはちょっと考えてみないといけないかもしれないですね。それから、私たちが調査した当時、ケーブルテレビというのはもちろんありましたけれども、今ほど多チャンネルにいろんなチャンネルがあって、しかもその中には非常に専門的なチャンネルも出てきた、そういう状況ではなかったわけで、今はそういう多チャンネルの時代ですね。これからますますチャンネルの専門化というのが進んでいくとすると、今言ったようなことは全体としてだんだん言えなく

なっているかもしれません。残念ながらその辺の調査はできていないので、それは想像するしかないわけですが、できれば、そろそろ 20 年近くたちますので、そういった調査がもう一度行われたらというふうに個人的には願っているようなところもあるわけです。それでは、具体的にもう少し細かいお話に入ろうと思います。資料の 9 ページですけれども、「テレビ放送の語彙調査」の概要というところです。そこに、先ほど申しましたように、私ども十数年前、20 年近く前に調査したときには、89 年の 4 月～6 月の 3 ヶ月間の全国のネットワークを持っている放送局を対象にしたということです。標本は、その 3 ヶ月間をすべて 5 分間の幅を持つ単位に刻みまして、それから週や曜日や時間帯やチャンネルができるだけ偏らないように構成した集団から、504 分の 1 というかなり小さい比率でランダムに抽出したものです。そうやって抽出した 5 分間の標本の数は全部で 364、総時間数は 30 時間 20 分です。ですから、余りたくさんじゃないんです。調査単位はほぼ文節に相当する長い単位、文節を思い浮かべていただければいいということです。その文節から助詞・助動詞を取り除いた自立語の調査です。その標本の語彙量ですけれども、延べ、異なり、そこに書きましたようなものです。全体を番組の本編と CM に分けまして、その中を更に音声と画面というふうに分けています。画面というのは、5 分間のサンプルになった番組をずーっとビデオで流して、そこに文字列が出てきたら、そこでカチッと止めて、プリントアウトしまして、そこでこの単語が何回出てきたというふうに数えるというようなやり方です。ただ、余りに小さいものでとか、当然これは視聴者の目には入らないだろうというようなものは、ある基準を設けて除外しました。しかし、テロップ、フリップ、ボード、それから実物の文字ですね、ニュースの中で実際の裁判所の「裁判所」というプレートでしょうか、看板でしょうか、あれが映ったりするときに「裁判所」という言葉は数えています。ただ、野球中継で、外野にボールが飛んだときに、外野のフェンスに書いてある広告がたくさんありますね。あれを全部数えたかというところ、あれは数えなかったんです。それは、基準を一応客観的に作りまして、恣意的にならないようにしました。そういうわけで、本編の音声で延べ 10 万語ちょっとという小さい調査なんです。最初に、テレビで外来語はどれくらい使われているかということで、今申し上げた音声と画面について語種の比率を調べました。9 ページの下のグラフのとおりなんですけれども、同じものが今スクリーンに出ていますけれども、この右から二つ目の緑のところは外来語の比率ですね。上が音声、下が画面で、いずれも

延べ語数，つまり回数を数えたものです。同じ種類の単語でも出てきた回数で数えているということですが，4%です，音声のほうは。ここが10とか20とかいうと「これは！」と驚くんですけれども，4%というのは昔の雑誌の比率と似たようなものですね。画面のほうは10%というふうに多くなります。これはなぜかということですが，テレビの画面というのは非常に小さいところですから，そこにたくさんの文章を盛り込むことができないので，どうしてもキーワード的なものをポンポンはめ込むような形になります。そうすると，漢語とか外来語の比率が増えて，和語の比率が減るということになります。これが今，延べですね。図1-2は異なりで集計したものです。異なりになりますと種類ですので，外来語の比率は10%程度になりまして，音声と画面とそう変わらなくなります。種類としては，ある程度1割ぐらい使われているということですね。それでも漢語や和語に比べ，あるいは今回は文節単位でやっていますので，例えば「抹茶アイス」を「抹茶」と「アイス」という小さい単位に切りますと，「抹茶」は漢語，「アイス」は外来語と分かれるんですけれども，今回の場合は長い単位で取っていますので，「抹茶アイス」などというものは混種語のほうに入ります。ですから，長い単位でやっているのだから，混種語の比率が多くなるんです。混種語については，実はその内訳を見ないと分からないんですけど，外来語は決して多くありません，ちょっと見てみたんですけれども。後でもしお尋ねあれば，中身を御紹介します。次に本編とCMでどうかということですね。図2-1というところですが，これはCMです。CMの，先ほどと同じような示し方で，音声と画面の延べ語数です。そうすると，先ほどの1-1と比較していただければいいんですけど，外来語の比率は大きく増えます。CMでは外来語が非常にたくさん使われている。本編に比べて使われているということが分かります。特に画面ではもう和語を上回っています。漢語に次いで，もう和語・漢語・外来語・混種語がほぼ四等分というような感じの使い方を画面ではしているんです。ですから，CMだけずっと見てみると，外来語が多いなあということに多分なるんですね。この辺り，本編とCMで語種構成比が大きく異なるということが分かります。これは図2-2の異なりで集計しても同じことです。特に異なりの画面では，混種語に次いで外来語が和語・漢語を上回ってしまっている，こういう状態です。ですから，CMという基本的に商品やサービスを売りたいという，そういう立場からいろいろなコマーシャルメッセージを放送すると，外来語の割合が高まっていくということですね。しかし，本編では外来語の使用はさほど多くないというこ

とがいえるわけです。次、11 ページにいきまして、番組のジャンルですけれども、テレビ放送の語彙調査では番組をその内容や形式から七つのジャンルに分けました。これは私たち担当者が勝手に分けたんじゃないで、視聴率の情報を提供してもらったビデオリサーチという会社が付けている分類に基づいて、私たちが7つにまとめ直したものです。ニュースなどを中心とする報道系の番組、それから教育・教養系の番組、それから情報番組というか、生活に関するさまざまな情報を提供する一般実用系の番組、それから音楽系の番組、それから娯楽を中心とするバラエティー系の番組、それからドラマやアニメなどのストーリー系、そしてスポーツ系の番組です。こういう番組別に語種構成比を取ってみますと、一番外来語が多いのはスポーツ番組だということが分かります。ほかに比べて非常に多い。その次が音楽番組、バラエティー番組ということですね。一般実用、情報番組や教育・教養というものはさほど多くない。図 3-2 の異なりの方だともうちょっとはつきりすると思いますけれども、3-2 のほうですと、スポーツが 15% ぐらいですね。それから、音楽、バラエティーが 10% ぐらいということで、番組の種類でいいますと、こういった番組で外来語が比較的ほかに比べれば多く使われている。特にスポーツ番組が抜きん出て多いということです。それから 12 ページにいきまして、今度は話者の性別ですね。話者の男女によって語種に違いがあるか。これは全くありません。昔の調査ですと、話し言葉で男は漢語を多く使う、女は和語を多く使うなんていう調査が 30~40 年前の調査ではあったんですけども、このテレビでは全くありません。4.2 と 3.9 ですけれども、これはほとんど誤差の範囲ですね。それから異なりでも 9.4 と 9.0 です。図 4-2 ですけれども、ありません。ただ、異なりのときに、ちょっとここ、男性が漢語が多くて、女性が和語が多いということが出るんですけど、これは、この当時は比較的テレビの中で男女の役割分担というのがまだあった時代なんです、この 89 年というのは。ニュース番組で、ニュース本文を読むのは男性アナウンサーで、女性アナウンサーは天気予報というような分担をまだしていた時代です。今はそういうことはもう全くないですね。気象予報士なんていう制度もその後導入されましたので、全く男女による役割分担というのはテレビの中では意識的に避けられて、最近では高校野球でも女性のアナウンサーが中継したりしていますので、そういう差は非常に少なくなっていると思います。次に話者の職業ですね。これは、私たちの調査で標本として選ばれた番組の中で発話した人のうち、私たちがいろいろ調べて、この人がどこの誰さんだと分かった人について、その人た

ちの職業を調べて分類したものです。それは、タレント名鑑などというのがあって、テレビに出て話すことを仕事にしている人（アナウンサーとかタレントとか）、そういう人たちはそのタレント名鑑というのに載っているんですね。その人たちが自己申告した職業というのがあるんです。どう見てもコメディアンだろうと思う人が司会者と自己申告しているので、しょうがなく司会者の類に入れちゃったりしていることもちょっとあるんですけれども、大体は、おおよそアナウンサーの類、タレントの類、専門家の類、そしてそのほか一般人の人、街頭でインタビューされたとか、クイズ番組に出たとか、明らかに一般人だと分かるような人にはそういう分類をして語種の構成比を調べますと、13 ページですが、図 5-1 や 5-2 のようになります。延べで見ると、アナウンサーの外来語使用率というのが 5.5%と、ほかに比べて高くなっています。延べで見るとこうなんです、5-2 の異なりのほうで見ると、アナウンサーとタレント類、専門家類というのは大体同じような 9%前後の比率になって、一般人の類だけが少し少ないということですので、アナウンサーの外来語使用率が多いということは必ずしもはっきりはいえないですね。それから、話者の年齢ですけれども、これもタレント名鑑などを見て分かった人だけです。しかも、アナウンサーとタレントを混ぜて比べても余り意味がないので、タレントだけに絞りました。タレント類だけで年齢別に語種構成比を見たのが図 6 です。これは延べだけで集計していますが、下から上に向かって年齢が 10 歳刻みで上がっていきますけれども、10 代が 7.2%、20 代が 4.9%、こう上にいくにしたがってだんだん外来語の使用率は減っていきます。ただ非常に小さい数字なので、これがはっきりした傾向なのかどうか分かりませんが、少なくとも、タレントに限ると、どうも若い世代ほど外来語を多く使っているように見えるということですね。ただ、これもはっきりいうためにはもっと大きな調査が必要だと思えます。それからチャンネルですが、図 7-1 ですけれども、基本的に、先ほど申しましたように、スポーツ番組で多いというような傾向がありますので、チャンネルによる差というのは出たとしても間接的ですね。つまり、スポーツ中継が多い放送局は外来語が多くなるというような形で恐らく出るので、チャンネルが直接外来語の使用に関わるということはないんだと思うんですけれども、一応見てみると、NHKの二つ（総合・教育）よりも民放のほうが外来語使用率は高く出ます。延べでもそうですし、異なりですともうちょっとはっきりしますかね。こんな感じで、民放は 9.2、7.5、9.4、7.6、10.5 といっているのに、NHKは総合、教育が 6.0%、6.5%ということになり

ますので、ひょっとすると民放のほうが外来語を多く使うということがあるのかもしれないのですが、しかしこれは番組の内容と関わることなので、一概にはいえないということです。そして最後、具体的にテレビでどんな外来語が使われているかということ、固有名詞を除いて数え上げたものが 15 ページから 16 ページで、15 ページにあるものは、中学生向けの『例解新国語辞典』という辞書があるんですけども、そこに見出しとして載っていたものです。そうすると、一番多かったテレビという外来語、あるいはニュース、ゲーム、ピッチャー、こういった辺りはもう辞書に載っているんですね。つまり、たくさん使われている外来語の多くは、もう中学生向けの辞書に見出しとして載っているようなものだということです。載っていなかったものを 16 ページのほうに挙げて、さっきのアイアイというのが先頭にきますけれども、そもそも辞書に載らないワンアウトとかツーアウトとかイエイというのが外来語かどうか迷ったところですけど、こういったものが辞書に載るってことはそもそもないだろう。それから、オレンジジュースなんていうのは、オレンジとかジュースは載っているんですけど、オレンジジュースは載っていないんです。こういうものを全部載せると、辞書がなんか喫茶店のメニューみたいになっちゃいますね。(会場笑)ですから、こういうのは載せない。載せないけれど事実上載っているも同じということで、こういうのを載っているって判断すると、辞書に載っていないような中学生レベルを超えるちょっと難しい外来語というものは、テレビでは余り使われていないんじゃないか。使われたとしても、頻度が皆低いんじゃないかということです。ちょっと時間オーバーしちゃいましたけれども、以上です。(拍手)

司会 石井さん、どうもありがとうございました。アイアイのデータはすごく面白かったです(笑)。それでは続きまして、今度は国語研究所の伊藤さんから「J-pop の中の外来語・外国語」というテーマでお話を頂きます。

「J-pop の中の外来語・外国語」伊藤 雅光 (配布資料 p.17~23)

伊藤 それでは、「J-pop の中の外来語と外国語」ということで御報告いたしますが、最初にちょっとお断りいたします。この J-pop の語彙調査というのは、これはあくまでも私のプライベートな時間に行ったものでございます。土日を使ってやった実験的な調査でございます。それでは、レジュメ 17 ページの 1 番。流行歌詞の中の外来語と外国語。まず明治・大正期ですけども、外来語は歌詞ではほとんど使用されておしま

せん。ただし、題名の中では使用され始めているんですね。253 曲中 22 曲で題名で使われている。ただ、使われているのは、人名のシューベルトとかブラームスとかといったような、それから国名とか地名ではポーランド、ワシントン、普通名詞ではストライキ、ハイカラ、ソング、メーデー、ペチカといったようなものが題で使われています。それから 1.2 の昭和前期（1926 年～1945 年までの間）、これは歌詞の中での外来語と外国語の使用が始まります。a の外来語ですが、「お菓子と娘」では、巴里娘、ボンジュール、エクレール、ラ・マルチーヌ。「当世銀座節」では、セーラー、ズボン、イートンクロップ、スネークウッドといったようなもの。それから「洒落男」では、モボ、これはモダンボーイの略で随分はやった流行語ですが、スタイル、青シャツ、ネクタイといったようなもの。そこに非常に多くの外来語を使った歌の一節を挙げてあります。それから「東京行進曲」では、ジャズ、リキュール、ダンサー、丸ビルといったようなもの。それから外国語の初出例としては、1930 年に発表されました「ザッツ・オーケー」という歌があったらしいんですが、これで「OK OK ザッツ OK」と、OK のところでアルファベットを使っているというところ。それから戦時中でも、ボタン、乾パン、消灯ラッパといったような外来語が使われておりました。外来語を使うなというような風潮が当時あったんですけども、歌の中では割と使われていたんですね。それから昭和中期（1946 年～1964 年）、今度は外来語が多用されるようになります。ただし外国語はまだ使われておりません。一般的な歌では、シャンソン、タンゴ、ワルツ、エレジーといったようなもの。それからブルース物というものがはやりました。（ダンス）ホール、エトランゼ、グラス、キャバレー、ドレス、ナイト・クラブといった、夜の世界の外来語が随分あるんです。それからエレジー物といったものもはやりました。ギター、マドロス、グラス、レビューといったような言葉ですね。それから、文レベルの外来語としては、「アイ・ラブ・ユー」というのが 1951 年の「星影の小径」というので使われていました。次のページをご覧ください。今度は昭和後期（1965 年～1988 年）では、外国語の題名が随分出てきます。「S・O・S」とか「UFO」とか「YOUNG MAN」といったようなものですね。それから歌詞にも外国語が使われてきます。「時間よ止まれ」では、「Ah PACIFIC」とか「STOP THE WORLD」といったようなもの。「チャンピオン」では「You re king of kings」,「ガンダーラ」では「In Gandhara, Gandhara They say it was in India Gandhara, Gandhara」という具合に、随分外国語の文そのものが使われているという状況だったわけです。さて、そ

れから以降はどうか。ここから J-pop の中の外来語と外国語ということで、中島みゆきと松任谷由実の調査結果を御報告します。なお、これまでの石井さんと橋本さんの調査は標本調査というやり方でした。つまり、母集団にあたる言語資料の中からアットランダム（無作為）にサンプルを取り出してきて、それで母集団の状況をその小さなサンプルを調査することによって予測するというやり方だったんです。私がやりましたのは全数調査になります。つまりすべての歌を調査いたしました。ただ、中島みゆきの場合はオリジナルアルバムを母集団としております。それから、表2の松任谷由実のほうはアルバム+シングルですので、去年までの歌が全部入っております。それで中島みゆきのほうは、曲数でいきますと 321、延べ語数が 3万 6216、異なりが 4410。松任谷由実のほうは、曲数が 347 曲、延べ語数が 3万 2130、異なり語数が 4981 という具合に、中島と松任谷はほぼ活動期が重なっておりますし、大体年に 1 枚ないし 2 枚のアルバムを出し続けてきたということです。5 年ごとに区切って見ますと、延べ語数がほぼ 6000 語というところで収まるんです。これは非常に好都合なことで、異なり語数の比較にブレが出にくくなるんですね。こういう具合にして、まずは 2.2 にありますように平均的な姿を比較してみます。そうしますと中島みゆきの場合は、一番上の棒グラフをご覧ください。その一番右側に外国語、赤い部分ですね、これは 2.8%しか使われておりません。それに対して、そのすぐ下の松任谷由実のほうは 10%。ですから、3 倍強も松任谷由実は使っているということが分かります。それから異なりで見ましても、中島みゆきは 2%、松任谷は 8.5%ということで、やはり 4.5 倍ぐらい使われている。ここから、松任谷由実というのは非常に外国語を使っているシンガーソングライターであることが分かりますし、中島みゆきは非常にその辺は抑えているということが分かるかと思えます。その次のページ 2.3 をご覧ください。今度は通時的に変化を見ていきます。まず図 2、これは中島みゆきの語種比率を 5 年ごとに見ていったものです。そうしますと、70 年代では全く使われていません。外国語は 0%です。それが 80 年代になるとわずか 0.7%、ちょっと使われた。ところが、85 年から 4.8%という具合に急に使いだすということが分かります。そして 3.9、5.9 と増加して、2000 年代、21 世紀に入りますと 2.1%という具合にガクンと下がるんですね。これと同じ傾向は実は松任谷由実にも見られます。次のページの図 4 をご覧ください。松任谷由実で興味深いのは、初期のころから外来語よりも外国語を多く使っていたということなんですね。赤い部分の左の水色の部分、4.2%というのは外来語ですが、外

国語は 4.3%使われているわけです。その次の 80 年代でも、5.9%の外来語に対して 6.4%の外国語を使っている。その後は一目瞭然なわけです。こういう具合に、初めから松任谷由実が外国語をどんどん使っていたシンガーソングライターだということが分かるわけです。それで面白いのは、84 年から急激に更に使いだしているということなんです。83 年までは 6.4%だったものが 84 年からは 11.7%、ほぼ 2 倍弱の量の外国語を使いだしまして、更にそれが年を経るにしたがって伸びていきます。13.1%、13.9%、ところが 2000 年代に入ると 12.7%、多少少なくなっている。ですから、まだ急激な減少ではないんですけれど、ちょっと少ないといえれば少ないというような傾向。これは先ほど見ました中島みゆきの増減パターンとよく対応しているんですね。また 19 ページにお戻りください。つまり 84 年あるいは 85 年辺りに何かがあったわけです。何かがあって二人共影響を受けているんですね。それは何かといろいろ考えてみたんですが、1977 年前後に実はアメリカ映画で「サタデー・ナイト・フィーバー」という映画がありました。これはジョン・トラボルタという役者を売り出した映画なんですが、そのときにディスコというものが日本に紹介されたんですね。それからディスコブームが日本で起こりました。そして 80 年代の後半はバブル期に重なります。それでディスコが非常に日本ではやりまして、そこでかけられる音楽はアメリカのディスコミュージックだったわけですね。ですから、英語を使うことが非常に格好いいというような風潮が当時あったというわけです。その影響を、実は松任谷由実だけではなく中島みゆきもどうも受けていたんじゃないかと。これは私の勝手な解釈なんですけれども、そういうことがちょっと考えられるのではないかと。ですから、先ほどの平均値では中島みゆきと松任谷由実の違いしか出てこなかったんですけれども、こういう具合に通時的に見ると、増減のパターンという点ではよく似ているということが分かってくるわけです。それでは、21 ページにお進みください。まず、21 ページで、今度は研究上の雑誌の用語調査についてちょっと御紹介いたします。雑誌 90 種とありますけれども、これは 1956 年に発行された当時の雑誌 90 種類を母集団として調査を行ったものです。それに対して雑誌 70 種というのは、1994 年に発行された雑誌 70 種類に基づいて行った語彙調査です。ですから、ほぼ 40 年くらいの差がありますので、その間にどれだけの変化があったかということをお見せしたいと思います。まず のほうでは、外国語は 2%しかありません、延べです、これは。ところが、70 種になると 2.6%ですから、1.3 倍ぐらい増えていると。それに対して異なりのほう

は、雑誌 90 種では 0.7%だったものが 70 種では 6.8%という具合に、10 倍の伸びを示しているということなんです。異なりでは非常な伸びがある。それから外来語に目を転じますと、のほうでは 2.7%だったものが 8%に伸びております。2.5 倍ぐらい伸びております。それに対して今度は異なりのほうでは、では 9.2%だったものが 24.7%という具合に、24.7%というのは左端の和語とか漢語と肩を並べるくらいの分量になっているということなんです。これはもう激増といってもいいくらいに種類が増えているということなんです。もちろん延べのほうでも 2.5 倍ぐらいの伸びがありますので、この 40 年間で雑誌に限ってみてもかなり外来語の使用が増えていることが分かると思います。それからその下、3 では、高頻度の外来語をあげてみました。表 3 が中島みゆきで、表 4 が松任谷由実です。ほとんど同じ単語がないんですけども、表 3 の 5 番目のバスという単語、それから 8 番目のガラス、この二つだけが共通しています。松任谷由実の表 4 でも 8 番目にバス、それから 10 番目にガラスというのがきていますが、そのほかは全部違います。つまり、それだけ異なっているということなんです。また反対にいうと、バスとガラスというのがキーワードだということですね。彼女たちがつくった歌の 80%以上は恋の歌ですので、日本の恋の歌において、このバスとガラスというのがどうもキーワードになっているということが、ここら辺から分かってきます。詳しい分析はまた後日やりたいと思っています。次のページをご覧ください。4、今度は外国語の高頻度を調査しました。そうしますと、表 5 の中島みゆき、表 6 の松任谷由実に共通しているのは、まず一番多いものとして I と You があるということなんです。これはほかの和語・漢語の語彙表を調査しても同じ結果になるんです。つまり松任谷由実なんかでは「私」と「あなた」が 1 位か 2 位を占めます。これはずーっと昔から分析をしてもそうなんです。ただ、80 年代から「君」と「僕」が入ってくるんですね。それに対して、中島みゆきも「私」と「あんた」が多いんですね。あるいは「あたい」と「おまえ」とか、そういうのが上位に入ってくる。結局こういう J-pop というのは、相手に対して語りかける文体を持っているということなんです。これが、60 年代、70 年代の流行歌を調べると、「私」と「あなた」というのは上にこないんですね。ここら辺が J-pop とそれまでの流行歌の違いとして挙げられるのではないかと思います。それから、21 ページにもう一度お戻りください。品詞のところをご覧ください。ほとんど全部名詞といっていいいわけですね、感動詞がちらほら見られますけれども。これは外来語の特徴です。つまり、外来語というのは

日本語に入ったときに、日本語の文の枠組みの中の名詞として入ってきているということなんですね。それに対して次の、もう一度 22 ページの外国語をご覧ください。名詞、代名詞とありますが、副詞とか動詞、形容詞、感動詞という具合に、いろいろな品詞が入っていることがお分かりかと思います。これが実は外来語と外国語の決定的な違いになるんですね。なぜ外国語ではこういう具合に名詞以外の品詞が入ってくるのかというのは、その下の 5 番目、日英混^ま淆文というところをご覧ください。(1)いつだって I Love You More Than You という具合に、文の単位として入ってくる、あるいは句の単位として入ってくるので、名詞としてだけ取り入れているのではないということなんですね。このために、名詞以外のいろいろな品詞が日本語の中に外国語として入ってきているということなわけです。今の日英混淆文、まあ、平家物語とかでは和漢混淆文ということが言われていました。つまり和文と漢文が混ざったような文体ですね。ところが、それと同じような現象が松任谷由実の歌詞では起こっている。つまり日本語の中に外国語がスッポリ入っているという状況ですね。ですから、「いつだって」という言葉は次の I Love You More Than You、「私はあなたが思うよりも私は思っているのよ、という状態がいつだってなんですよ」とかかっているんですね。つまり、いつだってから You までが一つの文になっているということです。それから(2)を見ますと、目をそらさずに Watch me! 腕を伸ばして Catch me!、つまり「目をそらさずに私を見て、腕を伸ばして私を抱いて」と、日本語と外国語が一緒になって一つの表現になっているということなんですね。更にいうと、(3)Nobody else あれほど愛せない、「ほかの誰もあれほど愛せないわ」ということなんです。それから、(4)あ 降りだした雨 ビルを見上げて I think of you、「ビルを見上げて、あなたのことを思っているわ」と言っているわけなんですね。こういう具合に、日本語の中にちゃんとした英語が組み込まれて一つの表現となっています。こういうのを私が日英混淆文と呼んでいるんですけれども、かなり求心的な表現が認められるということなわけですね。こういう具合に中島みゆきと松任谷由実の外来語と外国語を見てくると、それぞれ文体差があるんだけど、変化のパターンは実は一緒であるとか、それから、こういうような日英混淆文のような新しい文体をつくっているといったような現象が認められます。あと、解釈については、後ほどのディスカッションの中で広げていきたいと思いますので、私の御報告はここまでとさせていただきます。どうも御清聴ありがとうございました。(拍手)

司会 伊藤さん，どうもありがとうございました。

それでは，ここでいったん休憩時間を取りたいと思います。予定より5分ほど早く終わっておりますが，予定どおり3時半まで休憩にしたいと思います。今までのお話の中でどちらかというとデータの分析のお話がたくさんありましたが，是非そのようなことを基に，皆さん御質問になりたいことなどを質問票に書いてお出しただければと思います。それから，こちらでちょっと取りまとめの都合上，少し早めに10分ほどでまとめてお出しただけると大変助かります。なお，今後，この「ことば」フォーラムの内容につきましては，報告，それからこの後のディスカッションの内容を，文字化してホームページで公開していきたいと考えております。その際に皆さんからお寄せいただいた質問も取り上げさせていただくことがあるかと思っておりますので，どうぞそれを御了承の上，御質問をお願いいたします。その際に，質問をなさった方の御名前は出しませんが，その内容はそのまま使わせていただくことになるかと思っておりますので，どうぞよろしく御了解ください。この休憩の間は是非一つ御案内したいんですが，もうすでにお気づきかと思っておりますけれども，部屋の後ろで窓寄りのところに，今日，「ぎょうせい」という出版社のほうに来ていただいております。国語研究所から刊行している本で2種類販売しているものを御紹介しております。この場でも御購入いただけますし，それから，後からまた取り寄せていただくこともできます。「ことば」シリーズという本と，それから，「外来語言い換え」の報告書です。また，販売しているものではないんですが，出口付近に国語研究所の刊行物を並べておりますので，是非お手に取ってご覧ください。それでは，また3時半に御参集ください。

< 休 憩 >

【質疑応答・ディスカッション】

司会 それでは，後半のディスカッションに入りたいと思います。最初にちょっと一言，今日お渡しした資料の中にアンケートが同封されていたかと思いますが，今後の企画等を考える上で是非参考にさせていただきたいので，お帰りがけのときに記入して，こちらにお出しただければと思います。

伊藤 それでは，まず橋本さんに会場からの質問に答えていただきます。

橋本 頂きました質問について少しお答えします。まず，「通時的な研究をされていますが，戦前でも英語から取り入れた外来語がほとんどだったのでしょか」という御質

問です。外来語の中には、英語からきたものだけでなく、フランス語、ドイツ語ですとか、最近では韓国語、中国語ですとか、たくさんの国々の言語から言葉が取り入れられています。最近では確かに英語からのものがほとんどなんですけれども、この社説の外来語について調べてみたところ、80年度以降の英語の割合が90%に達していました。それでさかのぼっていきますと、61年～80年では87%、41年～60年では89%だったんですけれども、戦前にいきますと、1921年～40年では83%、1901年～1920年について調べたときには71%ということでしたので、やっぱり英語の割合が増えてきていると思います。英語以外のものさかのぼって言いますと、ポルトガル語ですとか、オランダ語から入ってきているものも戦前では多く見られました。それ以外で数の面で結構な割合を占めているのが、ドイツ語、フランス語であると思います。これは御指摘のとおり、戦後は英語がほとんどであったし、戦前についても7割以上は英語であるということで、もうちょっとさかのぼってみれば割合が変わってくると思うんですけれども、やっぱり英語が多いこと、そして増えてきて9割に達しているということがいえると思います。

石井 今のんですけれども、『言海』という辞書には、外来語がどの国から入っているという情報ありましたよね。だから、明治の最初のころの状況というのは『言海』のあれを見れば分かるんじゃないでしょうか、大槻文彦の。その後もいろいろあると思いますけれど。私が頂いた質問は、チャンネルごとの語種の構成比ですけれども、「NHKのほうがやや少ないというのは、外来語の使用というのが番組内容を難しくしているとはいえないか」という御質問ですけれども、これもですから、チャンネルによって外来語の使用率が違う、そしてそれはチャンネルそのものの何かの方針によって違うんだということをまず確かめないと、その辺りのことははっきりいえないと思うんですね。それを確かめるためにはやはりもっと大きな調査が必要で、私のほうのこの調査ではなかなかそこまではいえないと思います。ただ、放送局ですね、チャンネルっていうか、放送局ごとのその手の方針とか姿勢というものは全くないとはいえないんじゃないかなと思います。特に教育テレビ、これは当然子ども向けの番組も多く含まれていますので、その辺りで外来語を余りたくさんは使わないようにしようとか、分かりやすいものだけに限ろうということは当然あるんじゃないかと思います。それから、簡単な部分だからいいですか。「「だんな」というのはどうして外来語か」という質問なんですけれども、これは最後のほうのページのリストにあるんですね。こ

れはサンスクリット語でしょうか。古いインドの言葉からきているといわれているので、機械的に外来語と判定されています。国語研究所の語彙調査でこの語種の判定をするときには、ずっと代々伝統的に『新潮国語辞典』に従うというか、あれに基づくというふうにしているんですね。別に新潮がいいからということじゃなくて、『新潮国語辞典』は語種の違いが見出しの活字の違いで分かるんです。和語は平仮名で書いてあって、漢字が付いていないカタカナは外来語で、漢字が下に書いてあれば漢語というふうに分けてくれている数少ない辞書だったものですから、代々それに基づくことにしているんです。それで、私の資料の最後のページに「ぶらんこ」というのが出てきますが、これも一節にはポルトガル語かということも書いてあるようです、『広辞苑』などを見ると、さっきちょっと電子辞書を見せてもらったんですけど。多分新潮ではポルトガル語って判定がされているので、外来語というふうになっている。そういうことで、この「だんな」のような用語ですね、西洋外来語、あるいはカタカナ語というものからはこれは外れると思いますが、機械的な度数の調査では入ってしまっているということです。

伊藤 それでは、私に寄せられた御質問の中でまずは簡単なものから、日英混淆文の歌詞の歌手名は松任谷由実だけです。実は中島みゆきで使っていたのかという調査をやっていないんです。というのは、中島みゆきのデータは今週の半ばぐらいにやっと整理がついたもので、まだ精査はしていないんですね。ですから、ほかの歌手でも似たような、一つのレトリックだと思いますが、それを使っているであろうとは思いますが、今日挙げた資料はすべて松任谷由実の歌詞でした。それから、「NHKは外国語でしょうか」という御質問を頂きました。皆さん御承知のとおり、NHKというのは日本放送協会のそれぞれの漢語の頭文字を取ってNHKにしているわけですね。ですから日本語の頭文字を取ったものが外国語になるのかということですが、これは結論からいいますと、外国語扱いにします。といいますのは、和製英語の問題があるんです。シーズンオフとかフラダンスといったような、日本人がつくった英語のような外来語があるわけですが、それも全部外来語として扱うんですね。ですから、こういう略語のアルファベット表記のものも外国語の面立ちをしているので、一応外国語として扱うということをやっていきます。それから、外国語の判定基準として表記というものを中心に採用しているわけですが、これはすべての人に納得いただける基準というのはたてられないと思うんです。つまり個人的見解によって揺れる場合がある。つまり、

普通のカタカナで書かれた単語，これは外来語であろうと。それから，先ほどの日英混淆文に出てきたような，文の中で文の形としてアルファベット表記されているもの，これは外国語としても問題はない。ところがその真ん中にくるような表現があるわけですね。例えば真っ赤なネクタイといったとき，そのネクタイをカタカナで書いてあるものは当然あるわけですが，そのほかにネクタイだけをアルファベット表記にするということもあるわけです。じゃあ，それは外国語なのか，外来語なのか。ここで意見が分かれてくるわけです。つまり，それはただ単に外来語をアルファベット表記したものじゃないかと，だから外来語じゃないかという意見も当然あるんですね。ところがそれをやると，調査者によって結果にバラツキが出てしまうということが起こるんですね。そこで一つ線を引かなきゃいけません，基準といいますものは。ですから，基準をはっきりさせ，客観的なデータを出していくということが計量言語学の鉄則になります。ですから，多少問題があっても，誰でも作業で使えるような，客観的に結果が同じデータになるような基準を使うわけです。先ほどの橋本さんが御紹介くださった基準というのはこのようにして立てたものです。

石井 今のちょっといいですか。

伊藤 はい，どうぞ。

石井 私どもテレビ放送の調査ではNHKは日本語です。(会場笑)だからNHKというのは頻度にカウントされます。つまり，音声でNHKといったとき，当然カウントするわけですよね。文字でNHKと出たときに外国語と認めるということはないわけで，私たちの線引きは，今，伊藤さんがおっしゃったのとはちょっと違ってました。

伊藤 外来語？

石井 外国語ですね。ローマ字で書いているので外国語というような線引きはしなかったもので，いろいろあるんだと思いますね。

伊藤 はい。そこら辺はやはり統一したほうがよろしいと思いますので，私もいろいろ考えてみたいと思います。それでは，ちょっとディスカッションに広げられるような御質問がありましたので，お答えいたします。「最近では外来語よりも昔風の日本語が好まれるということですが，これは『国家の品格』や『美しき国へ』に見られるようなナショナリズム回帰とどう関わっているのでしょうか」ということが挙げられていますが，いかがでしょうか。

石井 ナショナリズムと和語・漢語回帰ですか。個人的にはいろんな意見があると思いま

す。私も個人的にいろいろ意見を持っていますけれども、その質問に答えられないので、大変申し訳ないんですが、私の基本的な考え方は、例えば漢語とか和語に回帰しているという現象が本当にそうなのかということから、まず調べたほうがいいんじゃないかということですね。それは特定の例えば4人とか5人で調べようたってできないんですね。ですから、いろんな人がいろんな領域で、本当に和語・漢語に回帰して外来語が減っているのかっていうことをどんどん報告し合って、それで果たして本当にそうなのかということを考えて、それを材料に議論したほうがいいという、どちらかというところを是非大事にしたいということで、本当に申し訳ないんですけど、そのことについては個人的な意見以外私も持ち合わせていないので、答えられない。すみません。

伊藤 橋本さんいかがですか。

橋本 はい。おぼろげには関係があるかもしれないなあというふうに思いますけれども、それを実証するのはとても難しいですし、何かいい方法があればいいなあというふうには思います。現象とそういう世の中の流れを結び付けるということは大変魅力的なことなんですけれども、なかなかその裏が取れないという状況です。ただ、その回帰的な流れというのは、日本の社会で何度も繰り返されていると思います。例えば70年代半ばにも、「美しい日本語」という流れがあったと何かで読んだことがありますし、そのときに例えば外来語の出現率が私の調査でも低くなっているというふうな、共通する現象が得られるということはあると思いますけれども、その関わりを証明するのはやっぱり難しいというので、何かいい方法があればいいなあという結論に戻ってしまうような感じがします。

伊藤 はい。

石井 「美しい国、日本」でしたっけ、そういうスローガンとかキャッチフレーズというのには比較的表れやすいかもしれませんね。随分前のJRは「ディスカバー・ジャパン」といっていましたよね。だから、あれをなんか「日本」とか「発見」とかいうような言い方をしていなかったというのは、多分そういう雰囲気醸し出したかったとか。だから、「美しい国、日本」という政治的なスローガンも、これを外来語で言っちゃうとなんかそぐわないとか、そういうことはあるでしょうから、ただ、それが歴史的に見て回帰かどうかというのはちょっと慎重な見方が必要かなと。

伊藤 はい。私が今考えているのは、まず、今テレビの流行歌を扱った番組とかを見ます

と、例えば「ポップジャム」とか、ああいうのを見ますと、英語、いわゆる外国語を使っている歌詞が非常に少なくなってきたというのが実感としてあります。それで、外来語も使わない、和語と漢語だけというのが多くなっているんですね。例えばアンジェラ・アキというシンガーソングライターが最近人気を得ているんですが（笑）、あの人が最近つくった「ふるさと」という歌を聞くと、外来語が出てこないんですね。もちろん英語も出てきません。ですから、そういうような日本回帰というような対する現象も出てきていると思うんですね。それが完璧に表れているのは、例えばジャパニーズ・クールといったような言葉がありますし、NHKのBS番組にも「クールジャパン」といったような番組がありまして、日本文化のどういうところが外国の方から見てスマートかクールかということ、いろいろなところで、住まいであるとか習慣であるとか、そういうものを扱っていくんです。そういうことで、実は今、世界的に日本ブームが起こっています。象徴的なのは鮭バーですね。パリなんかではもう100近くの鮭バーがあるとか、そういう具合に日本食がまず非常に一般化されてきました。実はその前の現象としては、マンガ・アニメがあります。80年代の後半に大友克洋が書いた「AKIRA」というマンガがありまして、そのアニメというのが、もう当時はスピルバーグ監督なんかもすごいと驚いたほどの出来でありまして、そのときはまだ一部のオタクのほうだけしか見ていなかったんですが、だんだんそれが一般化してきたんです。それが90年代の後半です。前半は、まだフランス・イタリア・スペインといった所のオタクたちが非常にもてはやしていました。割とアメリカは遅れるんですけども、それが基になって、じゃあ、マンガ・アニメだけじゃなくてミュージックはどうなんだと。そうすると、日本のロックは面白いじゃないかということで、日本のCDがどんどん輸出された。そうしたら今度は、日本の文化というと、歌舞伎とか、ああいう伝統文化がそれまで注目されていたんですが、日本人の日常生活はどうなっているんだということになってきているわけですね。それで食文化がどんどん受け入れられている、あるいは寝具としてのふとんがはやっているとか、畳がいいじゃないかとか、そういう店がパリなんかでもできているんです。ですから、そうなった母体には、日本の経済力が強くなった根幹にある技術力 電化製品であるとか、自動車であるとかいったものが全世界で受け入れられた。そういう優れた製品をつくっている日本人って一体どういう人たちなんだろう、という興味は前々からあった。それが今度はソフトな文化面でどんどん広がりだしてきた。私の世代はまだ西洋コンプレックス

があるんですが、今の 20 代の方はそもそもなくなっているんじゃないかと思うんですね。ですから、松任谷由実とかは西洋に対するあこがれがあって外国語をどんどん使ったけれども、今の若い人たちは外国語を使うことはそんなに格好いいとは思っていないんじゃないか。むしろ日本語の言葉で感動を呼ぶような歌が聞きたい、あるいはそういう映画が見たいというような風潮が今あると思うんですね。ですから、そういうことが外来語とかが使われなくなっている背景にあるのではないかというふうに考えております。そういう点でいかがですか。

石井 外来語を使わなくても済む領域ってあると思うんですね。和語とか漢語に回帰できる領域というか。でも、そうできないところもたくさんあって、結局この話というのはやっぱり、領域とかジャンルとか分野というんでしょうか、そういったものをある程度分けて話さない。ですから、橋本さんが指摘された新聞社説で外来語の伸びが鈍っているというのと、例えば J-pop といわれる歌詞の中で、外来語・外国語の使用がどうも減っているんじゃないかというようなものと同じ原因かということ、そうともいえないんじゃないかという気がするので、そこはなんか区別して話さないといけないんじゃないかなと思うんですけれどね。

伊藤 今、石井さんが指摘してくださったことは、レジメの 11 ページ、石井さんのデータですが、番組のジャンルによって語種比率が異なるというところですね。ここら辺と関連があるかと思います。例えば報道系では漢語の使用率が高いんですね。25% もあります。これは書き言葉が主体の日本語を使っているからであろうと思うんですね。それに対して音楽系とかバラエティー系では、漢語の使用が非常に少なくなっています。和語が多くなっています。これは話し言葉が基準となった文が使われているということなんだろうと思います。音楽の場合、何で外来語・外国語が使われるのかということ、これは一つの文を飾る文飾（レトリック）だろうと思うんですね。つまり外来語とか外国語を使うとなかなか格好良く見える。そういう動機から使っているんだと思います。ところが、報道系、新聞とか社説といったようなものは、とにかく内容を伝えなきゃいけないということですので、そんなレトリックで使われてはちょっと読み手はたまらないわけで、そこら辺で決定的な違いがあるかと思いました。どうですか。

橋本 ジャンルとか領域によって、現在、増えるのか増えないのかというのは違っているというふうな御指摘でした。ただ、私の出したデータで、なぜ 90 年代から鈍ってき

ているのかということについては、先ほどちょっとお話した新聞社に対する規制がかかっているという、書き手の心理的な抑制によるものではないのかということでした。では、どんな語が使われなくなっているのか。60年代にはなんでもかんでも外来語に置き換えて使っていたんだけど、今ではそれほどすべてを置き換えていない。けども、停滞しつつも増えていっているということは、外来語でないと表現できないものも、一方でかなり増えてきているんじゃないかなというふうなことも思います。それで、どういう語が置き換え不可能かというか、言い換え不可能なものなのかという点についても考えるべきだと思うんですけども、例えばレジメの7ページに高頻度の外来語なんかが出ていますけれども、これを見ても、いわゆる話題に関するもの、インフレですとか、テロですとか、ガスとか、そういうものも上位にきているんですけども、こういうのは確かに置き換え不可能なものであるというふうにはいえます。一方、社説の内容に関わらずに使われているであろう、つまり社説以外のテレビでも使われているだろうし、歌でも使われているだろうと予測される言葉もあります。例えば、グループとか、システムとか、ルールとか、レベルとか、ケースとか、イメージとか、バランスとか、こういう抽象語についてもやっぱり言い換え不可能なものとして多用されているという現状があります。

伊藤 今の外来語の増減の問題なんですけれど、石井さんのデータは通時的なものではないんですけども、20年くらい前の状況と比べて今のテレビで大きく異なったものとして、テロップが多用されたということがあろうかと思います。すなわち、ちゃんと日本語を話しているんですけども、その内容を文字でテロップで流すんですね。これはいつごろから始まったのかちょっと調べてみたら、「進め！電波少年」なんだという答えがありました。「進め！電波少年」というのは日本テレビ系列の番組で、1992年7月5日～1998年1月1日にかけてバラエティー番組だったそうです。アポなし取材のときに声が聞こえないことからテロップを付けたと。石井さんのデータはこれ以前のデータですので、多分テロップはなかった時代だと思いますね。そうすると、テロップが出てくると文字として視覚に訴えるわけですから、多少難しい言葉を使っても理解できるというようなことがあろうかと思いますが、そういうようなテロップの影響というのは増減に関係あるとお思いになりますか。

石井 本当に最近では、特に娯楽番組中心にタレントの発話が文字になって画面に出てきます。あれは私たちが調査したときには全くありませんでした。したがって今、私たち

と同じ基準で画面に提示される単語の頻度調査をすると、私たちのときの結果とは全然違ったものになるんじゃないかと予想されますね。それは、私どものときにはそういうものがなかったので、画面というのは、さっきの発表のときにも申しあげましたけれど、非常に制約された空間の中に提示するわけであって、話し言葉のように長たらしい文や文章の形で出せないんですね。そうなってくると、キーワード的なものをポンポンと置くというのが画面に提示された単語の特徴だったんですけども、それが今度いちいちの発話と全く同じものが画面に出てくるということになると、画面のほうの語種構成比も当然、文や文章の形になっているそういうものが多くなっていくわけで、そうすると、そういうものを支えている和語、これの比率が上がっているんじゃないかと今は思います。キーワード的なものってどうしても漢語とか外来語になりやすいので、文や文章の形にしたときに和語っていうのが出てくることが多いと思うんです。そういうものの比率が高まってくる。ですが、じゃあ、そうすることによって、まあ画面に出るんだから、外来語をもっともっと発話するようになるかというところ、これはそうはならないんじゃないかと思えますね。まだ、現在のテロップの機能っていうのが、何か難しい言葉を解説するっていう機能じゃないと思うんです。あれはなんなんでしょうか、一体。よく分かりませんが、とにかくなんか注目させたいんじゃないかな、その画面に。ただ、サーッと耳で通り過ぎてしまうんじゃないかと、画面で目でも確認できるというか。それは必ずしも説明を要するキーワード的なものの補助的な表現というか媒体ではなくて、別な意味付けというか機能を持たされているんじゃないかと思うんです、多くの場合。そうなると、必ずしもテロップを使うから外来語が増えるかというところ、そういうことはないんじゃないかなとちょっと思うんですがね。いかがでしょうね。

伊藤 橋本さんどうですか、その点は。

橋本聴取不可.....。

伊藤 なければいいんですけど（笑）。はい、それでは、次の御質問に移りたいと思います。「御提示くださったデータを見ますと、外来語とか外国語が非常に分量として少ないんですが、それなのになぜ外来語が氾濫している、あるいは乱用されているというふうに言われるのでしょうか」という、非常につぼを押さえた質問ですが（笑）、いかがですか、その点については。

橋本 先ほども言いましたけれども、延べ語数では本当に5%以下ぐらいのもの、異なり

語数では 10%とか、媒体によりますけれども、それでも 1 割ぐらいなのに、外来語が氾濫しているというのはなんかもう常套^{じょうとう}句化していて、それを言っておけば安心みたいなことになっています。最近氾濫しているというふうに私もよく言うんですけども、60 年代ぐらいから氾濫しているという批判はあったということなので、外来語は分量が少なくても、どうしてもそういう批判の目にさらされるような性質を持っていると思います。その一つとして、今はちょっとどうか分からないんですけども、ある時期に、いわゆる知識層といいますか、そういうような方たちが外来語を多用して、それを聞いている人が分からないというふうな事態がありました。今もそういう側面が強いと思うんですけども、そういう会話は相手の言っていることが分からないという、ストレスがやっぱり一つあるんじゃないかなと思います。その場合、本当に和語とか漢語で言えばいいのに、わざと違う言葉で言って分からなくしているというふうな、不親切な印象を相手に与えてしまうという側面があると思いますので、その辺りが批判を生み出す一つになっているのではないかと思います、いかがでしょう。

伊藤 石井さんいかがですか。

石井 今日、橋本さんは新聞の社説で、私はテレビ放送という、こういうマスメディアですよ。マスメディアの場合はやっぱり少なめに出ると思います、外来語の使用率は。これは仕方がないというか、そうであるべきだという、多分立場だと思うんです。ですから、なんか繰り返しますけれども、やっぱり領域、分野によって大分様子が違うんですね。氾濫とか乱用というふうに言われている分野もあると思うんです。それでやり玉に上がっているのは、官庁用語というか政府や自治体のものですね。これは、新しい何か政策を実行するとき、いかにそれが新しいものであるかということを訴えようとする、誰も知らない言葉を使うのが一番、一番とは言わないけれど、かなり官庁的なレベルで新しさを訴えることはできますね。そういうものは予算を取るための書類の範囲で収まっていればいいんですけど、取ったあとも、それが今度どんどん出てくるといふようなところがやっぱり大きく問題だと意識されて、一つの例としてはそんなことがあるし、医療の現場で国研の言い換え提案にもよく例として出されるインフォームドコンセントとか、それから災害が起こったときのいろんな情報伝達や、それから避難とかなんかのそういうもの、そういうところにも訳の分からないことを書いちゃうといけないわけで、数自体はそれほど多くなくても、分からない言葉があっては困るという切実さの度合いの大きい分野では、やはり外来語使用に対す

る批判というのは高まると思うんですね。ところが、あれはラップというんですか、ラップって私ほとんど聞き取れないんですけど、時々それこそ字幕が出ると、いろんな外国語・外来語がパーッと散りばめられているんですね。ああいうラップを聞いている人が、「これは外来語が多すぎるから、ちょっともっと抑えたほうがいいんじゃないか」なんてことは多分ないわけですし、その領域ではどんどん使えという話だと思っただけなんです、むしろね。だから、メディアだから非常に少ないように見えるというのが一つあると思うんですね。しかし、やはりたくさん使っているところもある。しかし、乱用というような価値判断というんでしょうか、それは必ずしも量と比例しないで、少なくとも切実なところは乱用とかそういうものはやめてほしいということに、そういう声になるんじゃないですか。ちょっとこれも個人的な解釈です。

伊藤 はい。今のことに関連しまして、ちょっと 21 ページをご覧ください。21 ページの上の図 6 です。これは雑誌の用語調査のデータの比較なんですけど、一番下の 70 種の異なりでは外来語が 24.7%あるんですね。ところが、延べは ですね、8%しか使われていない。頻度としては8%しか占めないということ。これは何をいっているかということ、外来語の1単語あたりの使用頻度が非常に少ない。ほとんどは使用頻度が1とか2とかいったようなものなんですね。実は、その下に高頻度語が出ていますけれど、高頻度語として使われるものは、基本語彙に入るものが多いんです、「いる」とか「する」とか「こと」とかいったような。そういうものは本当に目立たないんですね。空気のような存在なわけです。そのような空気の存在の中に見たこともないような外来語が使われると非常に目立つんですね。しかも表記もカタカナですので、漢字・平仮名の中でカタカナが出てくるとやっぱり目立つんです。それで印象が強くなるのではないかと。それから、戦中・戦前の文章と比べて戦後はやはり総体的に多いんですね。普通の雑誌・新聞でも外来語は多く使われている。そうすると、戦前・戦中に学校教育を終えられた方にとっては非常に目に付くわけですね、そういう外来語が多くなったと。ところが実際はそう多くないんです。全体として見れば多くないんですけども、とにかく随分カタカナの言葉が多くなって、何を言っているのか分からないといったような、戦前にはなかったようなことが戦後起こったので、それが問題になったんだと。それが氾濫している、乱用しているという言葉になってきたんだろうと思うんです。ですから、70年代ぐらいはかなり言われていました。マスコミでも、外来語乱用、氾濫ということが随分取り上げられています。ただし、その世代の人たちが実は戦中

に学校教育を受けたときには、英語教育とかは中止されたりしていたので、外国語に対する抵抗感が非常に強いんですね。ところが、戦後世代は中学校から英語を習っていますので、外国語に対する抵抗感がどんどん無くなってきているんです。ですから、外来語が多くなっても、乱用とかという思いとは結び付けにくいのではないかというふうに思います。ですから、御指摘のとおり延べ語数は少ないんですけども、目に付かない外来語が使われるととにかく目立つので、印象深くなって、乱用といったようなことに多分つながっているのではないかというふうに私は思いました。どうでしょうか、その点。

石井 ちょっと話がひょっとしたらそれちゃうのかもしれないんだけど、乱用というふうに私たちが自覚できる現象というのはいろんな人が抵抗感を持つので、それ自体なんかそのまま乱用が放置されて、乱用され続けるってことは余りないんじゃないかと思うんですけど。むしろ問題なのは、私たちが気づかないうちに、外来語が語彙の基幹的な部分に進出して、既存の漢語や和語に取って代わっているという事実です。これも私どものゼミの学生がやっている研究ですが、たとえば「ケース」とか「トラブル」とかいう外来語は、今や新聞やテレビなどのマスメディアでは基本語といえる地位を獲得している。昨日まで「事例」とか「例」とか「場合」とか言っていたのを、もう今日は「ケース」と言っている。それから、「事件」とか「事故」とか、「^{もんぢやく}悶着」とか「不仲」とか、「いさかい」とか「けんか」とか言っていたのを「トラブル」と言う。あるいは、「お肌のトラブル」とか「エンジンのトラブル」とか、もうテレビを見ていると、「何とかのトラブル」って本当にたくさん出てきます。昔の日本語では、「トラブル」と言わずに、いろいろ細かく言い分けていたんですよ。それを全部、今、一言で「トラブル、トラブル、トラブル」と皆言っちゃうということに、私たちは気が付かないわけですね。こっちのほうがずっと問題であって、問題というのは琵琶湖のブラックバスという話に近いのかもしれないけれど、とにかく私たちは昨日まで基本語には和語・漢語を使っていたのに、知らない間にそういう新聞やテレビというメディアが基本語を外来語に置き換えてしまっている。こういうことで本当にいいのかというほうにもっと関心を向けなければいけないんじゃないか、と思いますね。乱用とか何とかで目に付くところは、それは必ず誰かが文句を言うので、それはいいんだけど、誰も気が付かないところで、密かにメディアによって、勝手にといたら悪いけれど、どんどんどんどん実は置き換えられているという現象がどうもありそうだ。

それは樺島先生などがいち早く指摘していることで、そのところを考えなければいけないんじゃないかなと思います。ちょっとそれちゃったかもしれません。

伊藤 橋本さんはどうですか。

橋本 そうですね。質問の中に、「外来語が増える中、定着する外来語とそうでないものではどういった違いがあると思われませんか」というのもあったんですけども、今のお話とは随分重なってくるんじゃないかというふうに思いました。外来語がその場限りで消えていく、寿命が短いものが多いわけなんですけれども、そちらのほうにどちらかという目を取られてしまって、そちらを論じることが一般に多いかと思いますが、確かに、ケースですとかトラブルというふうな例が今ありましたけれども、領域をじわじわと広げていっている、基本語化していくという側面があると思うので、そういう調査がたくさん積み重ねられていくといいなあと、それが一番外来語の実態というのを知るために必要で、考えていかなければいけないことだなと思っています。

伊藤 はい、どうもありがとうございました。話題がちょっと言語政策のほうに移ってきましたので、それに関連した御質問がありました。「各講師の日本語における外来語・外国語の使用に関する個人的見解（特に言語政策との関連も含めて）をお聞きしたい。言い換えは行うべきかどうかということで結構です」ということなんですが（笑）、ちょっと私の話す番のようですので、私がお答えいたします。私は、外来語とか外国語というのをそのまま受け入れてしまうのは、実はかなり問題がある結果になるのではないかと思っています。というのは、明治期に大学ができたときに、最初は御雇い外人を入れてフランス語とか英語で授業をやっていたんですが、第一回、第二回のヨーロッパに留学した人たちが帰ってくると、御雇い外人は大臣級の給料をもらっていたらしいんですが、御雇い外人は皆、首になりました。それで、ヨーロッパに行っていた留学生たちが東大の先生になって、日本語で講義をやったんですね。これは実は大変なことなんです。東南アジアでは、旧宗主国の言語で大学の授業はやられています。ベトナムは、前フランス語だったんですが、今は英語でやられています。インドは英語で行われています。なのに、じゃあ、何で日本は日本語でできたのかというと、実は江戸時代に蘭学が発達しておりましたので、オランダ語の専門用語を漢語に直すということを随分やっているんですね。医学であるとか物理であるとかといったような領域で、大変な苦勞をして専門用語を漢語に訳しました。明治時代になると、アメリカからの知識、まあ英語が主体になってきましたので、今度は英語の専門用語を漢語

に直すということをやったんです。つまり、専門用語を漢語に直したので日本語で授業ができるようになったわけなんです。それは大変なことで、誰でも大学に行って授業を受けられるということなんです。簡単に言いますと。日本人であれば、とにかく試験を通れば、ちゃんと誰でもそんなに東南アジアの人のような苦勞がなくても大学の授業を受けられる。それが基になって、近代化とか高度経済成長とかそういうものに、つまり成功に結び付いたんだと思うんです。何もこれは日本だけの話ではなくて、古代のローマでもありました。当時はギリシャのほうがローマよりも文化が高かったんですね。ですから、いろんな哲学とか科学とかはギリシャ語で語られていた。ところが、当時のローマ人の賢人キケロ（シセロ）がギリシャ語の専門用語を全部ラテン語に直しちゃったんです。それがそのラテン語がヨーロッパの文語文とまでいわれるような大言語、つまり共通語になっていくという現象を生み出しまして、ですから、自国語に訳すということは、その言語を非常に強くすることなんです。ですから、外来語とか外国語をそのまま日本語の中に取り入れて使うと、日本語の活力がだんだん無くなっていく可能性があるのではないかというふうに私は思っております。別に、私は研究所の職員だから言っているわけではありません。言い換えをやっているのは、非常に私は大事なことなんだというふうに思っております。その点どうでしょうか。

石井 私も元所員なので（笑）、そういうことに関係なく、いろんな考え方があると思うんですけれど、一応この場に限って、じゃあ伊藤さんと反対の意見を言うことにしたいんですけれど。置き換えるというのは、要するに説明するというか翻訳する。つまり従来の我々の手持ちの言葉で言い換えるということですよね。そうすると確かに分かるってことになるのかもしれないんだけど、これは本当に分かるのか、あるいは分かった気になるのか、分かったようなつもりになるのか、ちょっと怪しいと思うんですね。経済学者の内田義彦さんという人が書いているんですが、「オリンピックは参加することに意義がある。日本人の多くは、これは、メダル争いとかメダルを取ることが問題なんじゃなくて、参加するってということ自体にオリンピックは意義があるんだと理解している」。もともとこれは誰が言ったんでしたっけ、クーベルタンか誰かが言ったんでしたっけ。そうするとフランス語かなんかですか、元は。でも、内田義彦さんは英語の例を挙げているんですが、「これは英語では、参加するっていうところは take part in というふうになっている。これはオリンピックという全体の催し物の一

端を担うという意味であって、単に競技だけではなく、オリンピック全体という催し物の一部を担うということが大事なのであるということを言っているんだ」と。だから、メダルを取れなくてもしかたがないという言い訳の言葉じゃなくて、それはどうしてじゃあそういうことになるかという、「参加」という言葉を当てたからですね。「参加」という日本語の言葉に、一翼を担って責任を取るというニュアンスがないわけです。だから責任を持つというニュアンスをどうやって込めたら良かったのか。これは非常に難しいですね。だから、言い換えるといいますけれど、確かに分かるけれど、今みたいな例だと、一番大事なところが抜け落ちて、つまり違った解釈を生じさせてしまう、そういう危険性が言い換えにはある。だったら、take part in とか何とかと言っているうちに、「take part in ってなんですか」「これはね、責任を持つことだよ」とか何とか言っていたほうがまだ健全かもしれない。つまり、分かった気になってどんどん誤解して行って、例えばリストラというのもそうですね。あれはリストラクチャリングとかなんとかいうんでしょ、元は。それは再構築だと。だけど要するに首切りという意味で使いますね。この場合は言い換えしないで、略語にして意味をずらして使っているんです。言葉というのは、とにかくそういう意味のずれていうのがしょっちゅう起こる。逆に言えば、ずらして使うわけですね。だから、ひょっとすると、「参加することに意義がある」と最初に言った人は、なんかメダルが取れなかった言い訳で使ったのかもしれない。それがそのままずっといったのかもしれないんだけど。要するに言いたいのは、言い換えるから分かるとか、言い換えないから分かりにくいとか、言い換えないほうが、さっき言いましたけれど、元の意味が保てるかということ、どうもそうじゃない。それは結局受け入れ方の問題であって、言葉をどういう言葉で呼ぶとか使うかということは、分かるとか分からないかということと実は関係ないんじゃないかという気がするので、言い換えなくてもいいんじゃないかと（笑）。これは論理的じゃないから駄目ですね。（会場笑）言い換えるから分かるというのはないんじゃないかなと言いたいということです。

伊藤 はい。あるいは誤解を与えた面があるかと思いますが、私は外来語を使うなど言っているわけではありません（笑）。外来語によって新しい考え方とか文物とかが日本語に入ってくることによって、日本語が活性化されるということももちろんこれはあるわけなので、その点は私も積極的に認めたいと思っています。ただ、ちょっと問題がずれるかもしれませんが、外来語と漢語を比較すると、漢語の場合は一字一字の漢

字が意味を持っていますので、新しい単語をつくっても大体何のことか分かるんですね。ところが外来語の場合は、例えばインターネットという語が入ってくると、それを全体で暗記しなきゃいけないわけですね。言語学者であれば、「インター」というのは「相互の」という意味であり、「ネット」というのは「情報網」のことだということでは分析はできるんですが、一般の方はそれはできないわけです。結局、外来語というのは、細かな部分的な意味が分からないままに、全体を一つの意味とつなげて受け入れていかなきゃいけないので、初めて見た外来語の意味というのはちんぷんかんぷんということが多いんです。ところが漢語の場合は大体予想つく。何のことに關する単語なのかというのが分かるという点では、非常に漢語というのはその面でも利点は高いのではないかというふうに思っています。何か橋本さんありますか。

橋本 私の見解としてはなるようになるのかなあと。(会場笑)すみません。無責任なようなんですけれども、やっぱり言葉というのは流れに乗って、なるようになっていくかなと思うので、言い換える指針というか目安を設けることは非常に有効だろうと思いますけれども、ほかの国の例をいくつか見ても、外来語の使用をやめておきましょうという政策を出しても、なかなか成功しにくいというか、やっぱり増えていく。必要があって使われるんだから増えていくというふうなことがありますので、その政策とかそういうものの性質にもよりますけれども、目安とか指針とか、そういう取り組みがあるのは非常にいいと思いますけれども、いろいろ考えてみても、やっぱり自然淘汰^{とうた}されていくというか、使われないものはもう使われなくなっていくのかなあとというふうな、ちょっと違う意見ですけれども。

石井 なんか言い換えが無意味みたいなことをさっき言ってしまったかもしれないんですけれど(笑)、そういうことではないんだけど。「成人病」というのが「生活習慣病」になりましたよね。あれは、当時の厚生省かなんかの委員会で長年議論して、「成人病」という用語が非常に大きな誤解を与える、子どものときから実は生活習慣をちゃんとしていないと、いわゆる肝臓病とかなんとか、いろんなものになっちゃうんですよということで、「生活習慣病」というふうに変えましょうと。これはパッと変わったんですね。お役所もメディアも全部、「生活習慣病」というふうになったので、「成人病」という言葉はそういうところから消えましたね。つまり言い換えというのは、やっぱりそういういろんな着実な検討を積み重ねて、こういうふうにしましょう、そして言い換えを完全に実行するという、なんかそういうことがあると多分うまくいく

んだと思うんですけど、漠然と外来語というものに関してなんか言い換えるというのは、ちょっとうまくいきそうもありませんね。だから、国語研究所でやられているものは、非常に大きな限定付きというか、限定を付けた上で言い換えを提案している。ですから、そういう方向は間違っていないと思うんですね。問題は果たしてそれが「生活習慣病」みたいに実行されるかということで、そのところが多分必ずしもあまり強制的なことって考えていないわけでしょ。だけどやっぱり、言葉直しというんでしょうか、これは日本語の語彙を部分的にだけど変えていくという、そういう運動というか、もっと大きな運動、つまり外来語だけじゃなく、専門用語とか漢語も含めた、そういう難しい言葉をどうしていくのかということ、全体の中でもっともっと言い換えというのは試みられていいし、で、その場合のやり方のノウハウを今蓄積しているんだと思ったらいいんじゃないかなと。

伊藤 はい、どうもありがとうございました。だんだん話が面白くなったときに、大体時間というのは来るものなんですね。例年 40 分の時間を取っていたんですが、どうしてもやっぱり物足りないという御意見が多かったので、今回は 1 時間にしたんですけど、それでもなかなか思うようにはいかないものだと思います。はい。今日はどうもありがとうございました。会場の皆様からもたくさんの御質問、御意見を頂きまして、心からお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。(拍手)

司会 最後に事務連絡をさせていただきます。先ほども申し上げましたけれども、資料の中に入っておりますアンケート、是非御協力お願いいたします。又今後、近いところでは 6 月に、今度は東京の国語研究所においてですけれども、又このようなフォーラムを開催する予定であります。今後の予定は順次研究所のホームページに載せますので、又是非ご覧いただいて、足をお運びいただければと思います。

本日は、どうもありがとうございました。(拍手)

< 終了 >